

2021年横浜ナザレン教会・復活節第四主日礼拝

「人の想いを超えた物語」

ルカによる福音書第22章1節から第22章13節

【聖書】

ルカによる福音書 22:1 さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた。2 祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた。彼らは民衆を恐れていたのである。3 しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。4 ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけた。5 彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。6 ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。

7 過越の小羊を屠るべき除酵祭の日が来た。8 イエスはペトロとヨハネとを使いに出そうとして、「行って過越の食事ができるように準備しなさい」と言われた。9 二人が、「どこに用意いたしましょうか」と言うと、10 イエスは言われた。「都に入ると、水がめを運んでいる男に出会う。その人が入る家までついて行き、11 家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする部屋はどこか」とあなたに言っています。』12 すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしておきなさい。」13 二人が行ってみると、イエスが言われたとおりのだったので、過越の食事を準備した。

1 神の愛の物語

今日の礼拝後には、2021年度の教会総会がありますが、その為に、先週、昨年度の活動報告をまとめました。そこで、喜田川信先生の葬儀について記していた時、ある方の葬儀への感想を思い出しました。それは、「最後、信先生の棺を、“主、われを愛す”の賛美で会堂から送り出せたこと、本当によかったです。」というものでした。この言葉が、先週ずっと私の心で響いて、「ああ、本当にそうだ、よかったなあ」と何度も思われました。私どもの人生も、山あり谷あり、実に色々な事がありますし、様々な思いや考えがある。ですが、結局、最後には「主イエスは私を愛してくださっている」に帰りつく。私どもは皆、主なる神の愛を知るために生かされている、主イエスの愛を喜びを通して神を賛美して、故人を御国に送り出せたことは、本当によかったなあ、と思いました。

その「主われを愛す」はもともと英語の讃美歌。「我が主イエス、我が主イエス、我が主イエス、われを愛す」という繰り返しの部分のもとの歌詞は、「Yes, Jesus loves me! Yes, Jesus loves me! Yes, Jesus loves me! The Bible tells me so.」です。最後に、日本語にはない「The Bible tells me so」「聖書は、私にそう語ります」という歌詞があります。旧約新約聖書66巻、壮大な神と人間の関係の物語が描かれている聖書は、天地万物を造られた全知全能の神がどれほど私どもを愛しておられるか、その事を語っている、と歌います。本当にその通りだと思います。66巻をもってしても語り切れない程に、神の愛は深く大きく高く、私ども人の想いを遥かに超えて広がっています。

その神の愛を描く聖書全巻のクライマックスは、イエス・キリストの十字架と復活、受難と甦りの物語でしょう。今日は、その受難物語の導入部分、舞台で言えば幕が開いてすぐの序幕と言えるでしょう。劇の開始を告げるブザーが劇場になり響き、客席の電気が落ちた闇の中に舞台が明るく浮かび上がり、主な登場人物が次々と現れる。序幕といえども、案外重要です。早くも物語のテーマが語られることもあります、今日は、皆さんと、主イエスの受難物語の始まりをご一緒に見ていきたいと思えます。

2 人の罪の深さ

受難物語は、過越祭と呼ばれる除酵祭に近いことを告げて始まります。過越祭も除酵祭も、紀元前1300年ごろの出エジプトを記念して行われるユダヤ人のお祭り。今日の聖書テキストの時代から1300年ほど前、イスラエルの人々はエジプトで奴隷として迫害され、民族滅亡の瀬戸際にありました。神は、人々の助を求める叫びを聞き、指導者モーセを立てて、迫害の地エジプトから民を救い出します。この神の救いの出来事を繰り返し思い起こすための祭りが過越祭と除酵祭なのです。これらの祭りが、神の民イスラエルを造り上げて行った、と言っても過言ではない程に重要なものでありました。

しかし、そのような神の救いを思い起す聖なる祭りが近いにも拘わらず、大祭司達や律法学者達は、イエスを殺すにはどうしたらいいか、とあれこれ考えていました。祭司長や律法学者は神の民の指導者達、ですが、彼らは神の戒めの中心にある「十戒」、その中でも重要な「汝、殺すなかれ」という教えを無視し、殺人計画を話し合っている、現代で言えば、牧師や神学者、役員など教会の指導者達が、自分達の邪魔をする者を陥れ滅ぼす計画を立てているようなものです。恐ろしいこと。そこには神への恐れは微塵もありません。命の造り主である天の御神は、また真に人を滅ぼす事がおできになる審き主でもあります。彼らは審き主である神を完全に忘れ、自分達が神となっている。自分達が神にならない限り、人を陥れたり殺す計画など立てられる筈ありません。

皮肉な事ですが、神を恐れなくなった彼らは、人を恐れるようになりました。民衆に人気のあるイエスを逮捕すれば、暴動が起き、彼らに打ち殺されるかもしれない、暴動鎮圧のためにローマ軍が出動する事態になれば、自分達が持っている特権的な地位が奪われかねない、彼らはそれを恐れていたのです。恐れるべき神を恐れなくなった時、恐れる必要もない人間を恐れるようになる、神の審きへの恐れ戦きは、私ども人間が健全に生きていくためには、欠かせないものなのだと思います。

そんな彼らの心の状況をよく表しているのが、6節。そこには、祭司長達や律法学者達が喜んだ、という言葉があります。「喜んだ」何度読んでも、心に突き刺さる言葉です。人を殺そうと企んでいたが、うまくいかない。ところが裏切り者が現れ、これでうまく殺せそうだと喜ぶ。彼らは、殺害計画の見通しがたった、という恐ろしい喜びにふけるのです。

そして、その悪魔の喜びを彼らにもたらしたのは、誰あろうことか、主の弟子イスカリ

オテのユダでした。イスカリオテ、「カリオテ村の男、ユダ」については、多くの説が取りざたされ、数えきれないほどの書物が書かれてきました。みな、どうしてユダがイエスを裏切ったか、理解できなかったからでしょう。ですが、聖書そのものは、私どもが期待するようには、謎解きのヒントを与えてはくれません。ただ一言、「十二人の中の一人で、**イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。**」と語るのみです。

イスカリオテのユダは、ただの弟子ではありません。ルカ福音書第6章12節から13節には、イエスが多くの弟子の中から、ユダを含む十二人を選び出す時、一人山に登り、神に祈って夜を明かした、とあります。主は、一睡もせず、一人で父なる神の御心を求め、ひたすらに祈られたのです。「この十二人を、どうか悪い者から守ってください」と額ずきひれ伏されたでしょう。イスカリオテのユダの為にも、真剣に祈られた。ユダはそのような人でした。更に続く第9章には、主イエスに選ばれた十二人が、イスラエルの各地に遣わされた様子が描かれています。主は、十二人に、「**あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気を癒す力と権能**」をお授けになり、神の国を宣べ伝え、病人を癒す為に遣わしたのです。その際、主は彼らに命じました、「**旅には何ももって行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。**」身を守る杖も生活必需品もそれを入れる袋も、お金さえも持つな、という旅は、ただイエスのみ言葉だけを頼りに出かける冒険旅行でした、ユダも、イエスだけを主とより頼み、神の国の福音をイスラエル中に伝えて行ったのです。そして、その後もずっと、イエスに従い仕えてきた、そのユダがイエスを裏切る、サタンに魅入られたとしか考えられない事でした。

サタンとは、人を誘惑し神から引き離そうとする、見えない大きな力、人が抗うことは難しい力の象徴と言えます。ルカ福音書では、第四章で洗礼を受けた主イエスを荒野で誘惑したのがサタンでした。主イエスが、サタンの誘惑を悉く退けた後、ルカ福音書はこう語ります。「**悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。**」(4:13)。その悪魔の時が、今、巡り来ました。こともあろうに、十二人の一人の中に入り込み、イエスを破滅させようと画策します。

私ども人間の内には、色んな考えや気持ちがあり、日々移り変わります。良い心も、悪い心もある、人は、絶対的な悪でもなければ、絶対的な善でもない。そんな私どもには、「魔が差す」としか言えない時があります。サタンが私どもの心にずっと入り込んでくる、道を誤らせる。ある程度、生きている者達ならば、サタンにつけ込まれる経験を多かれ少なかれ持っているのではないのでしょうか。人は弱いものです。イスカリオテのユダもそうだった具体的な状況は判りませんが、ユダがこの時、サタンに入り込まれやすい状態にあった、という事だけは確かだと思います。それは、どういう状態なのでしょう？

イエス・キリストの方を向かず、イエスの言葉を、主人の言葉として聴かなる時、私どもは、サタンにつけ込まれやすくなるのではないかと思います。ユダもそうでした。4節、「**ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き**」という箇所からそれが判ります。「もとに行き」と訳されているギリシャ語は、「もといた所から離れて、どこそこへ行く」とい

う意味があります。神殿の境内で弟子や民衆に教えるイエスの側をユダは離れ、祭司長や神殿守衛長達のもとに向かったのです。彼はイエスの方を向き、イエスを見つめ、その言葉に耳を傾けることをしなくなった。ユダにはユダの正義があった、彼の考えがあったのでしょう。それは、主イエスの言葉とは異なるものであったかもしれません。少なくとも、彼にはそう思えた。イエスのお考えが人の思いをはるかに超えるものとは、彼は知らなかったのですから。しかし、もしそうであるなら、何故、ユダは主イエスに自分の疑問をぶっつけようとしなかったのか。彼は、イエスとは関係なく自分を神としたかった。だから、そこをサタンにつけ込まれたのでしょうか。サタンは「イエスの言葉など聞く必要はない、大した力などない。お前は自分に忠実に生きろ」とユダを唆した。サタンの常套手段です。私どももまた、サタンから誘惑を受ける者であり、時にはその誘惑に載って、主イエスの方ではなく自分や他の人間だけを見てしまう者。イスカリオテのユダは、私どものある一面を映し出していると言えるのだと思います。しかし、ユダがサタンの誘惑にのり、イエス・キリストではなく、自分を主人として生きた結果、どうなったのでしょうか。

主イエスを宣べ伝える伝道師を、英語では「エヴァンジェリスト」と言います。「喜びの運び手」という意味があるそうです。「喜びの運び手」なんと良い言葉だと思います。かつて、イスカリオテのユダは「神の国は近づいた」という喜びの知らせを携えて、仲間と共にイスラエルの村々、町々を歩き巡った事は先程申し上げました。その時、ユダは「神の国の喜びを国中に運ぶ運び手」でした。しかし、自分を主人として生きようとしてイエスのもとを離れたユダは、サタンにつけいられ、人殺しの喜びを運ぶ者となりました。かつては、何の報いも受けず、神の国の喜びを運んでいたユダが、今、殺人の喜びをもたらした報いとして、殺人者たちから金を受け取る者となりました。

過越の夜に向け、人の闇が、底なしに深まっています。今や、主イエスの命は、祭司長達、律法学者達の手の中にあるようです。

3 神の救いの計画

ですが、真実は違うのです。このイエスの死の物語の主導権を握っているのは、誰か？受難物語の序幕に目を凝らせば、見えてきます。祭司長達や律法学者達ではない、ユダでもない、サタンでもない、イエスご自身であります。6節、「**ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。**」イエスは彼らの謀を全て知っておられ、いつ、彼らに自分を逮捕させるべく、いつ群衆から離れるか、イエスご自身が決める自由をもっておられました。

人の想いを遙かに超える事ですが、ご自身の独り子イエス・キリストを、自分達が神になろうとする罪人達の代わりに審き、徹底的に滅ぼす、それが父なる神の御心だからです。祭司長達や律法学者達が、自分達で進めていると信じて疑わなかったイエスの殺害計画は、実は神の御手の中にありました。天の御神は、人の罪がこれ以上ないほど深まったところに、イエスの十字架を打ち立て、彼をまことの罪人として十字架に裁き、滅ぼそうとされ

ているのです。私ども全ての人の罪を、まるごと贖うためにはそうするしかない。罪を犯した事のない唯一の方が、人の罪の底の底まで降りて来て十字架で苦しみ抜いて死ぬ、それ以外に私どもの罪が贖われ赦され、私どもが神の子とされる道はないから。だから、父なる神は御子を悲惨な罪に引き渡し、滅びに渡された。ここに愛がある、聖書は宣言します。人が考えることも思うこともできなかつた神の義なる愛です。

イエスは、この神の御心に従い抜き、ご自身の死の物語を自ら導いておられるのです。どんなに底知れない深い罪をも聖め、何としてでも救い出したい、という主イエスの熱い情熱が突き動かす受難物語です。

4 主イエスが備えてくださる

そして、遂に、その時は来ます。主は、過越の日、神殿とオリーブ山の往復というエルサレムに入ってから習慣を変えます。ユダに、ご自身を引き渡す機会を与える為でした。主は、ご自身の逮捕を過越の羊を屠る日としました。人々を救うために殺されて捧げられる小羊は神の御子。しかし、その前に、どうしても弟子達と過越の食事をしたい、そう考えられた主は、食事の準備をするためにペトロとヨハネを指名します。なぜこの二人なのでしょうか？

ペトロとヨハネは、ルカ福音書の続編である使徒言行録に、幾度も二人ペアで登場する事からも判るように、弟子達の代表のような存在でした。イエスは、その二人に「過越の食事の準備をなさい」と命じます。二人は問い返します。「どこに準備しましょうか。」イエスの言葉を聞こうと耳を傾ける弟子の姿です。ユダとは異なります。主は細かに二人に指示を出されますが、ここでも最後の過越の食事を実現したのは、ペトロでもヨハネでもなく、イエスご自身である事が分かります。

主は言われます。「見よ、エルサレム市内に入ると、あなた達は水がめを運ぶ男と出会う」。当時、水がめを運ぶのは女の仕事であり、男が運ぶ事はありませんでした。だから非常に目立っていたでしょう。この不思議な男は、ある家へと二人を案内します。イエスは、その家の主人に『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする部屋はどこか」とあなたに言っています。』と伝えるように二人に命じます。家の主人は、イエスと弟子たちに好意的な人のようです。床には絨毯がひいてあり、当時の人々が宴会に用いたソファのような長椅子、そして食事を置く低いテーブルがきちんと並べられ、すっかり準備が整った二階の大広間を見せてくれる、と主は語ります。果たして、ペトロとヨハネが行ってみると、何から何まで主の言葉通りでした。そこで、2人は、安心して過越の食事の準備を仕上げます。

5 イエスの言葉に聞く礼拝

主の言葉に忠実に従い、過越の食卓の準備をするペトロとヨハネ。この二人の姿に、後に現れる教会が映し出されているように私には思えます。勿論、この時、彼らにそんな自

覚などは微塵もない。受難物語を導く神の愛に、イエスの情熱に、彼らが気づいたのは、この数か月後。主の十字架と復活、昇天の出来事のあと、聖霊が降ってからでした。その時、主の弟子達は、神の愛が、自分達の想いを遥かに超えて、途方もないものである事を経験したのです。神はこれほどまでに自分たちを愛し、滅びから救い出し神の子の命を与えようとしておられる！イエスの十字架と甦りは全て我々の為であった、そう聖霊が彼らに語り掛けてくださったから、知ることができました。

このように聖霊が告げる神の愛は、神の御心は、いつも私どもの想いを遥かに超えるもの、いつも私どもの想定外。時にそれぞれが犯した罪を示し、悔い改めに導き、新しく造り上げてくださいます、時に思いもかけない聖書の言葉を通じて、絶望しそうな心に希望を与えてくださる、いつも私どもの内にはない、新しいものを与えてくださる。だから、私どもには、もうこれで十分祈った、もう祈らなくてよい、神に聴かなくてよいという事はありえません。繰り返し耳を澄まし続け、祈る事で、私どもは、新しい恵みを天の父なるみ神から受け取ることができます。

もし、神の方を向かず、神の御想いに耳を傾けず、自分達を主人とし、自分達の思いに生きるなら、わたし達は、神を見失い、第二のユダになってしまう、殺人の喜びを運ぶ者となる、イエス・キリストはどんなに悲しまれる事でしょう。

だから、私どもは、毎週、イエス・キリストの十字架の前で、主なる神を礼拝します。心から真実に自分を小さくして遜り、神を崇めて礼拝を献げる時、神は私どもの心に語り掛けてくださいます。イエス・キリストの十字架を通して、仲間と共に神の御前に心低くし、そのみ言葉に耳を傾けて献げる礼拝こそ、キリストの体なる教会を造り上げます。

イエス・キリストは、今日も、私ども横浜ナザレン教会のこの礼拝で、語りかけておられます。主の十字架を見上げ心と耳を傾けて、父なる神を礼拝し、主の言葉に新たにされる者でありたい、主の言葉によって新たにされる教会でありたい、と思います。そうして、信仰の仲間と共に、「主、我らを愛す！」と心の底からの喜びをもって賛美し続ける恵みにあずかりたい、最後の日まであずかりたいと、願ってやみません。